
学園黙示録 × バイオハザード

山田 利一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録×バイオハザード

【Nコード】

N2481P

【作者名】

山田 利一

【あらすじ】

学園黙示録とバイオハザードのクロス！

同じような小説があった気がするけどかいちゃうもんね！

チャプター1-1 (前書き)

毎日更新できるかな

チャプター 1 - 1

アメリカ合衆国のラクーンシティで起こったバイオハザードは核滅菌という形で幕を閉じた。

表向きには原子炉のメルtdownと知らされているが、事態を重く見た製薬企業連盟は対バイオテロ対応部隊を結成する。

その部隊にラクーンシティの生き残りであるクリス・レッドフィールドは極東での任務を行う為に輸送機に乗り日本上空を飛んでいる時に事件は起きた…

「BSAA日本支部こちら北米支部所属ヴァルチャー2-6。応答を、現在本機は床主上空を巡回飛行中… 応答を！」

C130輸送機のパイロットは日本支部に交信を試みているのだが一向に応答がない。

BSAAでは有事際に何時でも連絡が取れるように通信網は24時間体制で開かれている。

しかしパイロットが日本支部へ交信を求めてから30分も経っても応答が無い。

「どうした、日本支部にはまだ連絡が取れないのか？」

「依然に応答無しです大尉」

コクピットのドアを開け入ってきた、B S A A 北米支部所属隊員であるクリス・レッドフィールドに言う。

彼は日本で取引されようとしていたTウィルスの確保為に日本へ来たのはいいが、日本支部との連絡が取れずに床主市上空をずっと旋回飛行していたのだ。

「他の支部とはどうだ？太平洋には艦隊も居た筈だ」

B S A A では有事際に何時でも連絡が取れるように通信網は24時間体制で開かれている。

しかしパイロットが日本支部へ交信を求めてから30分も経っても応答が無い。

「どうした、日本支部にはまだ連絡が取れないのか？」

「依然に応答無しです大尉」

コクピットのドアを開け入ってきた、B S A A 北米支部所属隊員であるクリス・レッドフィールドに言う。

彼は日本で取引されようとしていたTウィルスの確保為に日本へ来たのはいいが、日本支部との連絡が取れずに床主市上空をずっと旋回飛行していたのだ。

「他の支部とはどうだ？太平洋には艦隊も居た筈だ」

「了解、太平洋上の艦隊に交信を試み…待ってください。」

本部より緊急コードを受信しました！コードはα4…」

「α4だと？世界規模のバイオハザードが起きたのか！」

「間違いありません、任務中の全隊員に帰還命令も同時に受信！」

「世界同時バイオテロ、厄介だな…我々はどこに向かうんだ？」

「床主洋上空港にて現地のBSAA隊員と合流せよとのことです」

パイロットは受信された命令文を読み上げる。

ちょうど床主市上空なので問題は無いのだが、クリスは現地隊員が誰なのか知らない。

「現地隊員は誰なんだ？連絡が取れるならしたのだが」

「元々の任務のファイルに隊員の資料があつた筈です。ファイルは…これですね」

パイロットから渡されたファイルを開き隊員の資料を探す。

そして資料を見つけるとクリスは目を見開く。

BSAA日本支部 特殊任務部隊所属 鞠川静香少尉…

それはクリスが良く知る同僚であり友人の名前だった。

所変わって床主市に存在する藤美学園。

そこに校医として勤務する鞠川静香は平和な日本に似合わないある物を手に校舎内を走っていた。

「まったくも、何で死んでいるとはいえ生徒を撃たなきゃいけないの？」

手に持っていたある物、拳銃であるグロック17をためらいも無く、奴ら<の眉間に撃つ。

普通なら殺人、しかし普通ではないのだ。

撃ち殺された生徒は死んでいる、銃で撃たれたのだから当たり前だと思うだろう。

でも生徒は撃たれる前から死んでいるのだ。

「α4が発令されるなんて…とにかく部隊に合流しないと」

教室から出てきた奴ら<、言い換えればゾンビを射殺しながら静香は廊下をさらに進んでく。

BSAAの任務の一つとして藤美学園に校医として勤めていたが、こんな事態が起きるとは思ってもいなかった静香はα4の発令すると、

保健室の薬品をバックに詰め校外に出ようとしたが学園全体のパニックと感染した元生徒達に阻められ今にいたるのだが。

「Tウィルスよね…でも感染してから死亡するのが速いし」

生存者はまだ見ていないが、α4発令から10分も立っていないのに多くの生徒が>奴ら<となっているのだ。

「新種のウイルスかな、とにかく校外に出なくっちゃ。生存者も探さないといけないし」

新しい弾倉を装填し今後の方針を決める静香、しかし今結構ピンチな状況なのだ。

発砲音に吸い寄せられてきたのか>奴ら<が集まりだし、弾薬も弾倉が三つしかない。

階段に居た>奴ら<を素早く倒し階段を上がっていく。

>奴ら<は鈍くさいので追いつかれはしないが、数で攻められれば簡単に負けてしまう。

「逃げるのが一番よね」

静香は>奴ら<をかわしながら階段を上り屋上に行き着くと扉を閉める。

この屋上には>奴ら<は居ない様で、静香は壁にもたれ掛かり息を吐く。

時折聞こえる生徒のであろう悲鳴、今の自分では何も出来ない。

静香は胸を痛めるが、頬をパシンと叩き気を引き締める。

このような状況は任務で体験してきたと言い聞かせ。

”ピーピー”

バックから聞こえる電子音にハツとし静香はあわててバックから無線機を取りだす。

「はいっこちら静香少尉です！」

「あいかわらず落ち着きが無いなシズカ」

「この声はクリス！久しぶりじゃない！今どこにいるの？」

「床主市上空だ、任務で日本に来たのだが…α4の発令は知っているな」

「ええ、私が任務で勤めている学校は、奴らで壊滅状態、街も煙が上がっているわ」

「上空からも確認した、シズカは洋上空港まで来れるか？
B S A A全隊員に帰還命令が出ている、戦力確保の為だろうが」

「難しいわ、今、奴らに追い詰められて学校の屋上に居るんだけど。」

「奴らになつた生徒が多すぎて下手に動けないの」

「なら俺がそこまで行こう、確か藤美学園だったな」

「そうだけどどうやって来るの？」

「待っていれば解る、5分後に会おう」

「待つてつて…切れちゃった」

無線機を仕舞い空を見上げると一機の飛行機を見つける。

C130輸送機、BSAAにも配備されている戦術輸送機であるがクリスの言っていたこと思ひ出す。

「確か上空に居るって言つてたわね、まさか…」

目を凝らして輸送機を見ると、何かが飛び降りた。だんだんと落ちてくるそれは、限界高度に達するとパラシュートを開きゆっくりと降下し、静香の居る屋上に着地する。

パラシュート降下してきた人物はベルトを外しパラシュートを降りし、静香に顔を向ける。

その顔を確認した静香は久しぶりに会った友人に手を上げ。

「久しぶりクリス！派手な登場じゃない！」

「これの方が速かったんでね、静香も無事で何よりだ。しかしその格好はなんだ」

「仕方が無いじゃない？校医として勤務中だったんだから」

静香の格好はブランド物のスカートに白いワイシャツ。対してクリスは完全武装、プレートキャリアにショルダーポーチ、武器はカスタムされたSCAR-LにM9だ。

「まあそれも予想通りだ、ほらシズカの装備だ」

クリスと一緒に持ってきた黒塗りのボストンバックを渡す。
中には軍使用のズボンとシャツ、装備も一式入っていた。

「流石クリス、用意が良いわ」

サムズアップした静香はすぐに着替え始める、もちろんクリスは向こうを向く。

「しかし酷いな、生徒のほとんどが感染している」

「ええ、それにいくらＴウイルスとは言っても感染が広がるのが速すぎない？」

「確かに、新種のウイルスも考えられるな。
それも部隊に合流しないと解らないが」

「そうね」

ジャキッチャージングハンドルの引く音、着替えが終わったようで
SCAR-Lを構えた静香がクリスの目に映る。

「準備が出来たようだ、合流地点は洋上空港だ」

「生徒の生き残りが居た場合は？」

「生徒が心配のようだ、見つけた場合は出来る限り保護をする」

「ありがとうクリス」

「当然の事だ、隠密行動で行くぞ。You Copy?」

「I Copy!」

拳をこつんと合わせ、再開した二人は地獄へと足を踏み出す。

チャプター1-1（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

まさかの爆乳静香先生がBSAA隊員という設定。

クリスと二人でどんなことになるのか…

他の原作キャラもちゃんと出ますので！

チャプター1・2（前書き）

更新じゃく更新じゃく更新じゃく

チャプター 1 - 2

藤美学園は酷い状況だった、生徒の殆どは 奴ら に変わり果てしまったからだ。

しかし生存者が居ない訳ではなかった、学園内の職員室では数人の生徒が 奴ら から逃げ延び立て籠もっていた。

「小室君、水だ飲みたまえ」

「ありがとうございます毒島先輩」

職員室に逃げ延びた生徒の小室孝は同じく逃げ延びた毒島冴子からミネラルウォーターを受け取り一口含む。

カラカラに渴いた喉が潤う感覚にひたると、孝は辺りを見渡す。

彼等は生き残った、 奴ら から逃げるとき犠牲は出たが職員室に逃げ込む事が出来たのだ。

彼の幼なじみである宮本 麗と高城 沙耶、友人である平野コータ。職員室に逃げてこれた5人はしばしの安息と、先の不安で一杯であった。

「これからどうします？学校を出ようにも外は 奴ら で一杯ですし」

「車があれば楽に行けるんだがね、運転出来る者が居ないしな」

「平野、釘打ち機はまだ使えるか？」

「使えるよ、でも残弾が少ないよ」

ガス圧式の釘打ち機を改造した平野のは残った釘を見せる。

頭を確実に狙ったとしても、生徒の大多数が 奴ら に変わった今、すぐに撃ちきってしまう。

「それよりも先ずは情報を集める事が先決よ」

血濡れの制服に身を包む沙耶はテレビをつけニュース番組を映す。

「各地で頻発する暴動に対して政府は…」

「暴動！？こんなのが暴動なはずはないだろう！」

「知事による非常事態宣言が“パンツ”待ってください、発砲です！警察が発砲を…きあやつ」

「現地で問題が起きた様です…こ、ここからはスタジオから…」

「駄目ね、ニュースじゃあ情報が統制されてるわ」

「なあ、これ世界中で起きているのかよ…」

「パンデミック、感染爆発よ。何処が始まりかしらないけど、あの感染力は尋常じゃないわ」

沙耶はやれやれと机に座り頭を抑える、唯一黙っていた麗は孝の制

服の裾を恐る恐る掴む。

「ねえ…これからどうするの？安全な場所あるのかな…」

「麗…」

「安全場所…東署はどうだろうか。橋の向こうだがそこしかあるまい」

「そこまでどう行かかが問題よ」

「そうだな…せめて大人が居れば車が使えるんだが」

「先輩、鞠川先生は見つからなかったんですよ？」

孝の質問に冴子は頷く、彼女は孝達と合流する前に保健室に寄ったが、薬品などが無く誰も居なかったのだ。

「薬品が無くなっていたって事は逃げたんですよ」

そう言う孝に冴子は「普通に逃げていたら」など言う。

「どうゆう事？」

「ふむ、高城君。逃げる時に不審な 奴らの死体を見なかったかい？」

「不審な死体？デブオタ、何か見た？」

「え」と確かにありました、額に穴の空いたやつ。たぶん銃に寄るモノかと」

コータの言葉に驚く皆、いや冴子だけは驚かなかった。

「平野、銃ってここは日本だぞ。なんで銃なんか」

「小室甘いよ、日本だから銃が無いなんて事はないんだ。ヤクザとかがいい例さ」

「問題はそこじゃないでしょ？」

「どうゆう事だ？高城」

「学園に銃を持っている奴が居るのよ？今は 奴ら が撃たれてい
るんだけど、いつ私達にそれが向けられるか…」

いくら冴子が強くても、コータが釘打ち機を持っていても銃の前で
は無力。

一方的な死を与える人殺しの武器の前では…

「だったら早く学園から出た方が良くんじゃない？車が無くても
奴ら は動きが遅いし…」

「駄目よ、歩きじゃ疲れが出て馬鹿力の 奴ら にいつか囲まれる
わ」

麗の提案をバツサリと否定する沙耶、相手は疲れの知らないバケモ
ノ。見つからないようにしても疲れて注意力が散漫になり、ボロが
出てしまう。

「ならば鞠川先生を探して車を運転してもらうかい？」

「そうね…あの先生普段又けいるけど、生き残ってそうだし」

「ならすぐに行動しよう、職員室に立て籠もっていても仕方がないしな！」

バットを掴み立ち上がる孝に他の者も立つ。

地獄と化した学園、生き残った5人の生徒達は扉を開け飛び出す。

探し人は鞠川 静香、無事に会合う事は出来るのか…

チャプター1-2（後書き）

さてさて、二話目の投稿という事で原作キャラの登場です。

鞠川先生が居ない状況での彼等は先生を探しにつ。

完全武装の鞠川先生を見たらどう思われるのか…

しかし駄文だなゝ

チャプター1-3（前書き）

更新だゝ、今回は原作キャラと合流だ！

チャプター1-3

時折聞こえる生徒のであろう悲鳴、逃げ切れずに 奴ら に食われ殺され 奴ら に変貌する生徒達。

B S A A 隊員として見慣れた筈の光景なのに、静香は心を痛めずには居られなかった。

任務で校医として勤務していたとはいえ、教え子には変わりは無かったのだから。

「大丈夫か？シズカ」

「平気よ、B S A A 隊員ですもの、割り切るわ」

「ならいいが、しかし生存者が居ないな…」

廊下をクリアリングしながらクリスはつぶやく。

二人は職員室のある校舎にいるが、ここまで来るときに出会ったのは 奴ら だけ。

生存者がまったく見つからないのだ。

「生徒全員 奴ら に変わっちゃったのかしら」

「まだどこかで悲鳴が聞こえるからそれは無いだろう」

奴ら に聞こえないよう喋りながらクリスは否定する。

SCAR-Lのマウントに装着されたダットサイトを覗き 奴らの頭を狙い引きがねを引く。

サプレッサーで消音されたSCAR-Lから発射された5・56mm弾は、 奴ら の脳を破壊し二度目の死を与える。

「やはり聴覚だけの様だな、目は死んでいる」

「そうみたいね、静かにいけば弾も使わなくて済むわ」

静香は残りの弾倉を確認して少し安心をする、今装填されているのを合わせて弾倉は8個。

奴ら を全部倒す気で居たらずぐに無くなってしまったらう。

「周りに注意品が音を立てずに行く、職員室はすぐそこなんだろう？」

「ええ、この廊下をまっすぐ100m先。私の車の鍵が待っているわ」

「廊下には 奴ら が10ないし15ぐらいか」

「動きが制限されるわね、手っ取りばやく倒す？」

「へまして食われるよりはマシか…」

クリスは静香の提案を受け入れSCAR-Lを構えると 奴らの

向こう側に人影をとらえる。

「人陰…生存者か？」

「まってクリス、私の知り合いよ」

同じく確認した静香が嬉しそうに言うと、クリスは銃を下ろし目を凝らして見る。

職員室から出てきたようで、人数は5人、ようやく出会えた生存者。

「こんなに居る！」

女子生徒の一人が叫び、 奴ら が引き寄せられていく。

数人が対応するが別の所からも 奴ら が現れ、生徒達を囲んでいく。

「クリス！」

「わかっている！確実に頭を狙え、一発で仕留めろ」

「大丈夫よ、狙撃では貴方にも負けないから」

サツと構えたSCAR-L、静香は 奴ら 頭を見事な腕前で撃ち抜いていく。

クリスも負けずに続いて 奴ら を撃つ。

「な、なんだ！？」

「奴らの頭が…」

「平野お前か？」

次々に倒されていく 奴ら に生徒達は呆然と立っている。

その中で一人、木刀を構えた女子生徒の毒島 冴子は廊下の先に銃を構えている二人を見つけていた。

「その生徒！こっちに来い！」

呆然としていた生徒達、 もとい孝達はクリスと静香に援護されながら走る。

「平野行くぞ！」

「まって小室っ」

「なんなのよあれって銃じゃん！」

銃を持ったクリス達に困惑しながらも、 顔が視認できる距離に来ると。

「ま、鞠川先生い！？」

いつも天然な保険医の静香が銃を構え、 奴ら を倒していく姿に驚く。

「貴方達生きていて良かったわ」

そんな孝達にニツコリ微笑む静香、思わず気が抜けてしまう。

「先生、それっ！SCAR-Lですよ！何で先生が！それに格好も…」

「君達、話はあとだ。声に引かれて 奴ら が集まってきた」

「貴方は？」

「話は後だ少年。シズカは先頭、俺は殿をする」

孝の質問にクリスのはぐらかし、さらに集まってきた 奴ら 後退を始める。

職員室付近は 奴ら で埋まり、車のキーはもう駄目だろう。

迫る 奴ら から逃げ、孝達と合流したクリスと静香は教員用の休憩室に来ていた。

「で、そちらの方は誰なんですか？それに鞠川先生の格好も」

さつきした質問を聞く孝に、クリスはどう答えるか悩む。

B S A Aのことは一般人には秘密なのだ、それに静香の事もどう説明するかも。

「何か隠そうとしても無駄よ、こんな状況でそんな装備しているんだもの、警察でも自衛隊でもない事はわかるわ」

沙耶の言葉に驚くクリス、この賢い娘には嘘はつけないない。静香にアイコンタクトをすると頷いたのでクリスは話し始める。

「我々は国連の対バイオテロ対策部隊B S A Aに所属する隊員だ」

「B S A Aだつて!？」

「知っているのか平野？」

「世界的に展開する秘密部隊があるって噂があったんだ、それがB S A A」

「彼は少し知っているようだが、俺は北米支部所属のクリス・レッドフィールドだ」

「そして私が極東日本支部所属なの」

クリスに続けて言う静香、孝と麗は呆然と。

コータは装備に興味津々だ。

「国連の対バイオテロ部隊ね、先生がその隊員だったのは驚きだけだ。」

その隊員がそんな重装備で居るってことは、今回の事は関係しているのね」

「中々賢い娘だな、恐らく今回のコレはバイオテロだ。世界規模のバイオハザードが起こっている」

「先生が保健室に居なかったのも、察知してたと」

「そう、本部からα4が発令され隊員全員に帰還命令が出たから」

冴子の言葉に申し訳無さそうに言う静香。

「で、クリスさん。これからどうするつもりだったの？それと私は高城 沙耶だから」

「高城 沙耶ね、本当ならすぐにでも床主洋上空港に行きたい所なのだが、要救助者が居るからな」

「BSAA隊員としては貴女達を安全な所につれて行かないと」

「なら私達はついていくわ、学園からも出るつもりだったし。小室達もそれでいいでしょ？」

振られた孝達は黙って頷く。

「く、クリスさん！そのSCAR-L持たしてくれませんか？」

目をキラキラと輝かせクリスの持つSCAR-Lを見つめ頼み込む。

「一般人に持たすのは気が引けるんだが…」

「大丈夫です！コレでもアメリカに行った時にブラックウオーターのインストラクターに一ヶ月教えて貰っていましたから！」

「PMCのインストラクターか、少しだけだぞ」

コータの熱意に押されクリスは弾倉を抜いたSCAR-Lを渡すと、コータはウツヒョーと構えたりし始める。

「サイトは弄らないでくれよ、カスタムしてあるからな」

「あのクリスさん」

「なんだい？君は…」

「小室孝です、こっちは幼馴染の宮本麗です」

「孝に麗か、何か聞きたい事でも？」

「床主空港に行く前に俺達の親を探したいんですけど…」

親を探したい、中々の親孝行者だと関心するクリスだが、彼らを危険な場所にをうろつろさせるのも気が引ける。

「私からも頼もう」

「毒島先輩…」

「毒島冴子といいます、床主空港に行くにも彼等の住む街をとりますから」

「そうか、いいだろう。民間人の救助も任務だからな。しかし、これは言って置かないといけない。もし君達の親が死んでいたら？」

クリスの言葉に孝と麗は固まる、親が死んでいたら、親が奴らになっていたらどうするか…

孝達は学園を脱出するまで答えを出す事は無かった。

チャプター1-3（後書き）

さてさて、クリス達と合流した訳ですが。

これからどうなるのか、孝と麗はどんな答え出すのか…

チャプター1-SS(前書き)

今回は短いです

オリキャラ登場！

チャプター1 - SS

B S A Aは世界中に部隊を展開しているが、その中で大規模な部隊がある。

それはB S A A加盟各国から派遣された艦艇で編成された艦隊。

名目上は国連艦隊と称されているがれっきとしたB S A Aの主力部隊だ。

艦隊の旗艦であるニミッツ級空母ジョン・アーウィンでは世界中で起こったバイオハザードの対応で奔走していた。

現在はB S A Aの部隊を集結を謀っていたのだが。

「北米支部との連絡は取れているんですね？」

「はい、しかし北米支部以外は全く連絡が取れない状況です」

ジョン・アーウィンのブリッジで、上がってきた報告書に目を通す女性。

艦隊指揮官のセレナ・リンドバーグはα4発令と共にB S A A支部と連絡を取ろうとしたのだが、北米支部以外の支部と連絡がとれないのだ。

しかもα4を発令した本部も1時間前から音信不通である。

「展開しているユニットとはデータリンクは出来ませんが……」

「そのユニットは？」

「日本に展開している北米支部所属のヴァルチャー2-6です。日本で取引されようとしていたTウィルスの確保任務の為、同所属のクリス・レッドフィールド大尉を輸送していた様です」

クリスの名前が出るとセレナは驚いた様に書類から顔を上げる。

「クリスが日本に？連絡は取れますか？」

「待ってください、ヴァルチャー2-6と回線を繋げます…どうぞ」

「こちら太平洋艦隊指令リンドバーグ大佐です」

「ヴァルチャー2-6機長のノイラント少尉です、いかがなさいましたか？」

スピーカーから流れるパイロットの声。

「α4が発令されたのは知っていますね、クリス・レッドフィールドと話したいのですが…」

「レッドフィールド大尉は現在近くにおられません、床主市のBSAA隊員と合流するためパラシュート降下した後連絡がつかないのです」

「そうですか、今は日本の床主市に居るんですね？」

「本機は床主洋上空港に駐機していますが、恐らくレッドフィールド大尉は床主市の藤美学園にいるかと」

「学園…ですか、そうすると要救助者を確保している可能性がありますね」

「学園には多数の生徒が居るはずで、要救助者を確保している可能性はあります」

「そちらから部隊は出せる？」

「日本支部とは連絡が付きません、空港に帰還したユニットも現在は空港の 奴ら の排除で手が離せない状況です」

思っていた以上の深刻さ、セレナは三つ編みされた銀髪を弄る。そして隣に立っていた初老の副官に顔を向けると。

「艦隊から部隊を派遣するしかありませんね…中佐、今の状況でどれだけ部隊を捻出出来ますか？」

「我が艦隊は日本に程近い海域を航行中です、大隊規模の部隊を派遣出来ますが…床主市に大隊全部を派遣出来ませんからな、二個小队と航空支援ですな」

「よろしい、では揚陸艦に伝えて部隊を編成させなさい」

「アイ・マム」

「少尉はレッドフィールド大尉との連絡を取れる様に」

「了解です」

指示を出し終わったセレナは、テーブルに置かれた書類を一枚拾い

眉をひそめる。

「中佐」

「何でしょうか艦長」

「米国の動向はどうですか？」

「大統領府はホワイトハウスを放棄、エアフォース・ワンで上空待避した様です。

それに伴い太平洋に展開しているヴァージニア級が弾道弾発射深度に浮上しています」

「先制核攻撃の準備ですか…こんな時に何をしているのか。中共と北鮮は？」

「同じの様ですな、中共のIRBMとロシアのミサイルに燃料の注入が確認されています」

「核戦争ですか…各国首脳は今回のバイオテロの真相を知っているでしょうに」

「国の面子が有りますからね、特にアメリカはそうでしょう」

「いざという時は我々が迎撃をしなければいけないでしょうか…」

「日本はイージス艦とPAC-3がありますからね、しかし陸からの迎撃行動は期待できないでしょう」

「奴ら ですか…」

洋上待機しているイージス艦なら大丈夫だろう、しかし 奴らの対応で混乱している中でPAC-3を抱える部隊は迎撃行動は取れるかどうか。

「BSAAの範囲ではないですが、大国意外で弾道弾迎撃能力を有する我々が介入するのはやむなしでしょう」

「ならば引き続きヴァージニア級と中共と北鮮の監視を厳に。在日米軍との連携も視野に入れていきましょう」

「第7艦隊の無事も確認できています、掃討作戦の資料も作成しておきます艦長」

「よろしく願います中佐」

副官は「では」と敬礼しブリッジから出て行く、世界規模のバイオハザード起きてまだ数時間、若い艦長は一層に気を引き締める。

戦いは始まったばかりである。

チャプター1 - SS (後書き)

今回のお話は、BSAAの艦隊指揮官のオリキャラの話です。

これからバしばしと出るので期待を！

でもぶっ飛びすぎだよねー

チャプター1-4（前書き）

一日遅れの更新！

チャプター1 - 4

孝達と合流したクリスと静香、学園から脱出するのに学園の所有するマイクロバスを使う事になったのだが、

バスのキーは職員室にあり、> 奴ら<が居る場所。

当然キーを取りに行くことになるのだが、全員で行くことは無いのでクリスが一人で取りに行くことに。

他は先にマイクロバスのある駐車場に行くはずなのだが、今クリスの隣には木刀を携えた毒島冴子が居た。

「君も彼らと行って貰うつもりだったんだがな」

「いえ、これは私の意志ですし、いくら銃があるとはいえ一人では厳しいでしょう」

すでに他を連れた静香は駐車場に向かい、休憩室にはクリスと冴子だけ。

接近戦ではかなりの強さを持つ彼女が居れば楽だろう。

「要救助者である冴子は戦わせたくないんだが、無茶はしないこと」

「引き際は心得ておりますので心配なさらずに」

「日本のサムライはすごいな、では行こう」

クリスは小回りの利くM9に持ち帰ると先頭に立って休憩室を出る。
ここから職員室までは距離にして200mほど、職員室のある校舎
とは別の校舎居るのでまずは渡り廊下を通らなくてはならない。

「奴らくを音を立てずに回避していくが、渡り廊下を渡ろうと言う
時に問題は起きた。」

「（クリスさん、あれは…）」

「（人を食っているんだろう、叫び声で集まったのか数が居るな…）」

「

渡り廊下の手前、逃げ遅れた生徒が多数の「奴らく」に食われていた。
そして生徒の叫び声で引き寄せられた「奴らく」、今は気づかれてい
ないが、対処に困る数だ。

「（別の道に行くしかないか…）」

「（遠回りになりますが、二階から行くのがベストでしょう）」

今居る場所の左前を指す、階段には「奴らく」は居ず簡単に昇れるだ
ろう。

二人は会談に素早く走ると、警戒しながら上っていく、途中クリス
は冴子を見るがその表情に恐ろしさ、怖さが見えない。

（彼女はこの状況を楽しんでいる？ 奴らに引かず立ち向かって
いたし）

「（どうしました？私の顔に何か…）」

「（いや、何もないさ。廊下に出るぞ）」

階段を上り終わり、廊下に差し掛かる。

クリスは先に廊下に出て状況確認をすると一瞬だが何かが窓をはっているのを見た。

（BOW！？まさかこの学園に投入されているのか）

「（クリスさん、 奴らは別の所に引き寄せられた居るようです。外から声が…）」

下とは違い廊下には 奴らは居ず、耳w済ませると外から声が聞こえる。

「（生徒の生き残りか、シズ力達は音を発てるようなマネはしないからな）」

「（そうでしょうね、どうしますか？）」

「（心苦しいがバスのキーを優先するしか有るまい。声の大きさからして距離もある）」

「（そうですか、一階へは渡り廊下を渡って校舎内、右に階段があります）」

「（分かった、 奴らが居ないからと気を抜くな…やな予感がする）」

さつき見た影、それがもしアノBOWであつたなら…クリスの背中に嫌な汗が伝う。

渡り廊下の扉をゆっくり開け、足を踏み出す。

クリア、普通なら言うところだが言えない。

周囲に気を配りながら校舎のドアへと歩く、クリスの後ろを冴子も警戒しながら付いていく。

彼女も何か感じているのか、木刀もいつでも使えるよう構えている。そして渡り廊下の中に刺し当たったとき、クリスは冴子を抱き寄せる。

「えっ、クリスさ」

「走れ！校舎だ！」

クリスの怒声、いきなり抱き寄せられて困惑した冴子だが、目の前に居るバケモノを見て木刀を構えなおす。

「走れと言ったんだがな」

「クリスさんは戦うんでしょう。それに一人では分が悪いでしょう」ニヤリと笑いクリスの隣に立つ冴子、二人の前には長い舌を揺らしながら獣の様に地をはう異形の元人間。

目は完全に退化し、体は筋肉と血管が丸出しのグロテスクな姿。

「奴の舌には気をつけろ、それにしぶといからな！」

発砲、M9から発射された弾丸は バケモノ には当らず避けられた。

ジャンプした バケモノ は渡り廊下の天井に張り付き冴子に舌を延ばす。

鋭く迫る舌を木刀で弾こうとするが、逆に木刀のしたを巻きつけられ引っ張られる。

「なっ、このっ！」

「足を踏ん張れ！」

すぐさまクリスは バケモノ の舌をナイフで切りつける、スパッと切れた舌からどす黒い血を撒き散らしながら バケモノ はクリスに飛び掛る。

ナイフで舌を切っていたクリスは対応できなかったが、お返しと言わんばかりに冴子の木刀の一閃が バケモノ の頭に決まる。

「ナイスだ冴子、助かった」

「こちらこそですよ、しかし厄介な相手ですね」

「奴は人間を元に作られた生物化学兵器だ。」

目は退化しているが強靱な肉体と巨大な爪が厄介だ」

木刀を頭に食らった バケモノ は血を吐きながらその爪を壁に切

りつけ威嚇をする。

「頭を直接叩く、グレネードを打ち込めば木っ端微塵だ」

「でも避けれたらどうします?」

至近距離でのM9の弾丸を バケモノ は避けた、弾速の遅いグレネード弾など簡単に避けられるだろう。

クリスはSCAR-Lのマウントに装着されたランチャーに弾をこめると冴子を見る。

「私が奴の気を引きます…」

「大丈夫かい?」

「不謹慎ですが、ワクワクしてるんですよ。」

私は武人ですから、強敵を前にどこまで通用すかを!」

木刀を下段に構え足を踏み切る、冴子の音察知した バケモノ は爪を振るが冴子は屈んで回避。

「フツ!」

下段からの振り上げ、木刀はちょうど顎の付近に当り砕くまでには行かないが後ろへと飛ばす。

しかし着地した バケモノ はジャンプし冴子に飛び掛る。

「ハアア!」

だがひらりとかわした冴子はわき腹に上段からの斬りで床に沈める。

「下がれ！」

バックステップでクリスの横まで下がる冴子、それを確認したクリスはランチャーの引きがねを引き、グレネード弾をバケモノに撃ち込む。

「ギヤアアア！！」

「伏せろ！」

クリスは冴子を覆うように隠しす、グレネード弾は爆発し辺りに肉片が飛び散る。

「大丈夫か？冴子」

「ありがとうございます、でもやりましたね」

「着弾して体内で炸裂したからな、しかしすぐにここを離れよう」

「ええ、騒ぎを聞き付けて 奴ら が来るはずですから」

グレネード弾の爆発を聞き付けた 奴ら が来る、冴子を立たせるともう音など気にせず走る。

「しかしあれが元は人間とは」

「BSAAでの呼び名は リッカー、BOWと呼ばれる生物科学

兵器」

「兵器ですか？」

ドアを開け校舎に滑り込む、まだ 奴らは来ていない。

「今回のコレも科学兵器、ウイルスで起こされた事だと言ったな？
そのウイルスで作られた兵器だ」

「外道ですね…」

「だからこそBSAAなんだよ、しかし約には立っていないがな」
苦虫を噛んだように笑うクリス、防げるだろう事態を防げなかった…

世界は破滅に向かっている。

「だが防げなかったが、守る事は出来るがな」

次にはもう覚悟のある顔に、それを見た冴子は強い者を見つけた獅子の目をしていた。

チャプター1-4（後書き）

今回は リッカー が出てきました！

クリス達の所に出てきたと言つ事は…

チャプター1-5（前書き）

投稿！

チャプター1-5

先に駐車場へと向かった静香と孝達、途中生き残りの生徒と合流し今は下駄箱で>奴ら<に足止めをされていた。

気づかれてはいないのだが、逃げ遅れた生徒を喰らうためにかなりの数が下駄箱に居たのだ。

「（どうするんですか鞠川先生、銃で何とか…）」

「（流石に数が多すぎるわ〜サプレッサーがあるから銃声は心配ないんだけど）」

「（弾薬の問題ですね…）」

ミリオタのコータは静香の危惧していることが分かっているようで、自分の持つ釘打ち機の残弾を確認する。

しかし何時までもここに居る訳にも行かないのが現実だ。

「（>奴ら<は音に引き付けられるんだから、遠くで音を出して遠ざければ良いんじゃないの？）」

「（でも生半可な音じゃ全部は引き寄せられないんじゃないか？高城）」

孝の返しに沙耶はうつと声を詰まらせる、音に引き寄せられると言っても物を投げて出した程度の音量では>奴ら<を全部は遠ざける

ことは出来ないだろう。

「（ならこれを使いましょう）」

と静香がプレートキャリアーのポーチから出したのは円筒のある物。それを見たコータが思わず耳と目を塞いでしまう物。

「（せ、先生それは？）」

「（スタングレネード、音響閃光手榴弾とも言っわね）」

閃光はともかく音量は180デシベルと爆音とも言える音起こせる非殺傷兵器。

これならば>奴ら<を簡単に引きよせらるが…

「（そんな物使ったら別の所から>奴ら<が来るでしょうっ）」

そう、下駄箱から>奴ら<が居なくなっても別の所から>奴ら<が引き寄せられてしまうのだ。

「（なら、どうするのよっ？）」

「（先生はこの手のプロでしょうが、何でここで天然が出るのか…）」

ばわばわとする静香に額を押さえる沙耶、さつきは格好良かったのと思う孝達に状況の分からない助けられた生徒。

「（しょうがないか、上手くやれば弾倉一つで済むし）」

嫌な空気になった所で静香は結局銃で仕留めることにし、下駄箱の陰から出るとSCAR-Lを構える。

「（ドアに近いのから仕留めるわ、空いた隙から外に出なさい）」

天然モードから一変、本気モードのチェンジし奴らの頭を撃ちぬいていく。

しかし薬莢の落ちる音で奴らが静香達の存在に気づいてしまう。だが静香はそれを使い、孝達が外に出やすいように奴らを引き付ける。

「先生！」

「ここは私に任せて行きなさい！直ぐに終わるから」

既に10体の奴らを倒している静香、外への退路も完全に確保し残っているのは静香と数人。

そして弾倉一本使ったところで、静香は空弾倉を音を立つように投げ捨てると外へと急ぐ。

走る間に新しい弾倉を装填し後方を確認し外へ、先に行った孝達と生き残り生徒は階段を降り駐車場へと走っているのだが周りへの注意が足らなかったのか。

生徒の一人が持っていた刺又が金属のポールり当たり、カーンと音が響いてしまう。

「しまっ…!!」

「まだ集まってるな! 走れ!」

音に引き寄せられた>奴ら<に囲まれる前に安全な場所へと走る。

遅れて外に出た静香も生徒に近い>奴ら<を撃ち援護をするが、今回は数が多い、マイクロバスにたどり着いてもまだキーが無い。

「ぎゃあーーーー助けっええ!!」

とうとう生徒の一人が捕まり捕食されてしまふ、腹を食い破られ内蔵を引き出され血を吐き絶命し、>奴ら<に変貌する。

「先生! スタングレネードです! 遠くに!」

釘打ち機で応戦しているコータが叫ぶ、この状況だとこれしか手が無い。

耳を塞いでと静香は言いつつスタングレネードのピンを抜き、駐車場の反対に投擲。

数秒して爆音が学園中に響く、耳を塞いでいても鼓膜を痛めつける音量。

襲おうとしていた>奴ら<は新しい獲物を見つけたかのように離れていく。

助かった、と安堵をするが犠牲者が出てしまった。

一人は既に>奴ら<に変わりもう居ない。

そして刺又をぶつけた生徒は離れた所で、彼女だったのか女生徒と一緒に、奴らに貪られていた。

「私止めたのに…どうして」

「死ぬんならせめて好きな人の傍に居たいという思いでしょう…」

「それは私には解らないわ先生…」

「私はわかるなあ…」

「とにかく安全な場所に行きましょう、クリスさん達がキーを持ってきてくれる筈です」

バットを構えた孝が女三人の所へ来て言う、> 奴らくを退けたとは言え、駐車場の真ん中に突っ立っているのも危険だろう。

しかしキーも無くマイクロバスの中には入れないので、安全な場所など無いスタングレネードで引きつかれた 奴ら もまた集まってくるのも時間の問題である。

（鍵なんか壊してもいいけど、その後の安全が問題だし、クリス早く来て～）

今居る生徒は小室達を合わせて12名余り、バスの鍵を壊してドアを開けてもいいが安全性が欠けてしまう。

ふと、静香が校舎を見ると教室の一つに人影を見つける。
距離があり良くは見えないが。

（何かから逃げている？）

「（どうしました？先生）」

「（いえ、小室君。あそこの教室見えるかな）」

「（あの教室ですか？え」と、人影…何から逃げています、てか生存者っ）」

「（多分手遅れよ、残念だけど 奴ら に囲まれているはずよ）」

声は聞こえないが女生徒の叫び声で 奴ら を引き寄せているだろう。

「助けて!!」

教室の窓を開け生徒の一人が助けを呼ぶが、頭を何かが貫く。

「なっ」

それを見てしまった孝は目を逸らし、声に気づいた他の物のそれを見て絶句する。

そして後ろから現れたのは異形のバケモノ、 奴ら とは違う何か。

クリス達の所に現れたBOWとは別タイプのBOW。

リッカータイプの派生型で、退化していた視力はそのままで小型ながら強靱な肉体とパワーがあるBOWだ。

「な、何だアレは…」

「BOW、人間を元に作られた兵器よ」

「兵器？アレが兵器だって言うのっ！」

「そうよ、しかもリーパータイプ。あれ一体だけで私達は全滅よ」

「ど、どうすれば…」

「逃げなさい、まだ私達には気づいていないわ。
私が引きつけるからその間に」

「でも先生はどうするんですかッ」

「私はBSAA隊員ですから、アレを殲滅しないと」

静香は不安そうに涙を浮かべる麗の頭を撫でると、リーパーを見る。
まだ仕留めた生徒の脳を齧っていて気づいていない。
仕掛けるなら今だろう。

（徒歩で逃がす事になるとはね…このタイミングでクリスが現れて
くれるといいんだけど）

「シズカ！」

「本当に良いタイミングねクリス！」

校舎から現れたクリスと冴子、クリスは手に持っていたキーを静香
に投げる。

「エンジンをかける！リーパーは俺が相手する！」

「了解！」

キーを受け取った静香はバスの鍵を開け、生徒達を中に入れる。

「行けサエコ、アイツに接近戦は分が悪い」

「分かりました」

クリスはSCAR-Lを構えリーパーに向ける。

どうやら食事が終わり、バスに乗り込む生徒達に気づいたらしく壁を這い降りてきている。

そして 奴ら もバスのエンジン音に引かれ始め、集まりだして時間もない。

（リーパータイプ、5・56mmじゃ心もとないが。頭に数発入れれば！）

距離にして150m、クリスの正確な狙いで撃たれた二発の5・56mm弾は見事にリーパーの頭に直撃するが、リーパーは平然と壁を降りてくる。

「ちっ、リーパーTYPE2かつ！」

再生能力に特化したリーパーシリーズのTYPE2。

5・56mm弾ではすぐに再生されてしまう、倒すなら対物ライフルか粉々に吹っ飛ばすしかないだろう。

「クリス！出発できるわよ！」

運転席に座る静香の声、生徒達はバスに乗り終え後はクリスだけ。

ならば逃げるのが一番、リーパーが来る前にバスに乗ろうとクリスは身を翻すが。

「待ってくれ！」

生き残りだろう、校舎から生徒を引き連れた教師が逃げてくる。

「あれは…誰だ？」

「学校の教師ぐらい覚えておきたまえ小室君、紫藤先生だ」

「紫藤…」

「援護する！走れ！」

クリスは戻るのを止め援護を始めるが、リーパーが地に着いてしまった。

それに 奴ら に囲まれつつある、状況は最悪である。

それにクリスは紫藤と言う名前に覚えがあった、元々の任務であった資料に紫藤という名前があったのだ。

（紫藤…日本の紫藤議員の息子で教師か、シズカの方が詳しく知っているだろう）

「皆さん！もう少しです！助かりましょう！」

生徒達をバスへと先導する紫藤、端から見れば良い教師だろう。

「嫌よ！アイツを乗せるなんて！」

（嫌っている生徒も居るようだ…）

「ああつ、足が！先生、足を挫きました！」

逃げてきた生徒の一人が転び、近くに居た紫藤に助けを求める、クリスは助けるだろうと横目で見ていたが。

こともあるうに紫藤は生徒の顔を踏みつけ自分は逃げたのだ。他の者は逃げるに夢中で気づいていないが、クリスは目撃してしまった。

顔を蹴られた生徒は 奴ら に食われ、紫藤は悠々とバスに乗り込む。

「クリスさん！」

バスから孝がクリスを呼ぶが、クリスは逃げ遅れの生徒を見つけてしまう。

「助けてえお願いっ！」

紫藤と一緒に逃げてきた女生徒のようで、近くにリーパーも居る。

「先に行け！シズカ頼んだぞ！」

「クリスさん！鞠川先生いいんですか！」

「クリスは大丈夫よ！」

バスのドアを閉めると、静香はアクセルを踏み校門へと走らせる。

（無事でね、クリス…）

サイドミラーには女生徒を助けに行くクリスが映っていた。

チャプター1-5（後書き）

間があいての投稿でしたが、今回は学園脱出です！

紫藤が出てきましたが、今回のテロに関わっているのか…

チャプター1 - S S 2 (前書き)

久しぶりの更新だ!!!

チャプター1 - SS2

床主洋上空港、メガフロート技術を使用したそれは大きさにして羽田空港に匹敵するほどの大きさを有する空港である。

外界から遮断されているが、ここにも 奴ら の脅威はあった。

「こちらサクラ、ダリア任務だ」

「任務？今はターゲットの始末中よ」

ビルの屋上、そこに陣を張っているSATの二人の隊員。

一人はシューティンググラスを掛けPSG-1を構えた大人な色気をかもし出している女性。

隣にポインターの男性がスコープで滑走路を覗いている。

「ヘリポートの安全を確保せよ、国連の大隊がこちらに向かっている」

「国連の大隊？この地獄を平和維持活動に着たのか？」

ポインターの皮肉る、この状況を見て地獄と言わないでどういえばいいのか。

「対バイオテロの部隊らしい、日本近海に展開している国連艦隊が来ている」

「はん、気に食わないわね」

「何がだ南」

「床主になんかに一個大隊を投入する事よ」

南リカは俳優であつた 奴ら を撃ち言う。
ポインターであり相棒の田島は確かにと頷く。

「とにかくヘリポートのターゲットを殲滅せよ。 増援を向かわせる、サクラアウト」

無線が切れるとリカはP S G - 1のストックを積み立ち上がると、来ていたベストの中に手を入れ自信の胸を揉み始める。

「何やってるんだお前は」

あきれたように言う田島、しかしそれでも見るのは男の性。

「うつ伏せしていると胸が疲れるのよ、面倒臭い任務も言われたし」

「でも一個大隊が来るんだぜ？ 空港も取り返せるぞ」

「確かにね、仕方ないやりますか」

「おう」

二人は屋上からヘリポートを見渡せる所に移動を開始する。

太平洋上空では床主洋上空港へと向かうヘリの大群があつた。

UH-1Yが20機、シーナイト20機のヘリボーン大隊。

隊員を150名を乗せた部隊である、護衛にAH-1Zが数機随伴し一都市に向かわせるには大規模な部隊だ。

「こちら床主コントロール、アプローチを許可する。

ヘリポートB-25へ進入せよ”」

「了解床主コントロール」

「ハンター中隊は日本支部へ、リマ中隊は空港に展開だ。

空港には日本の法執行機関の特殊部隊が展開しているが空港の確保には到っていない」

「リマ中隊が空港を確保すればいいんですね？」

「そう言う事だヘックス、床主には既にBSAA隊員が二人居る」

「日本支部の奴らはどうしたんですか？」

「音信不通だ、居るのは北米支部のクリス・レッドフィールドだ」

「ヒュウ、オリジナル11の古参ですか。なんで日本に居るんですかねえ」

「司令の話だと任務で床主市に来ていたらしい、それで現地のハイスクールにパラシュート降下だ」

「流石あ！」

「私語は止めろ！リマ中隊降下用意。現地部隊がターゲットを掃討しているはずだが気を抜くな！」

中隊長の激に隊員達は黙り装備の確認を始める、ハンター中隊は進路を日本支部へ向け。

リマ中隊を乗せたヘリボーン部隊は空港を視界に捉えた。

「降下用意、ヘリポートはグリーン。現地部隊は良い仕事している」

「リマ1、リマ2が先に展開する。他は上空で援護！」

平行飛行する二機のUH-1Yがヘリポートに着地し、小隊を吐き出すと直ぐに上空へと上がる。

「展開した、ターゲットは無数接近中！」

「リマ6までヘリポートに降下、残りはビル屋上に降下だ！」

中隊長の指示、事前の情報で生き残りが空港のビルの一角に立て籠もっているらしく。

ビルを制圧する部隊とヘリポート周辺を制圧する部隊と分けたのだ。

「ガンシップ！滑走路は傷つけないように蹴散らせ！」

「了解した、密集している所にロケットを撃ち込む」

護衛として随伴して来たAH-1Zがターゲットにロケット弾を撃ち込んでいく。

圧倒的な火力で蹂躪していく彼等にSATの隊員は攻撃を止め啞然

としていた。

「圧倒的だな…」

屋上の一角で田島はポツリとつぶやく、隣ではやる事の無くなったリカがそれに頷く。

「攻撃ヘリが相手だからね、しかも最新鋭の機種だし」

「国連の奴らはこんな戦力あったのか」

「艦隊も保有しているし、でも楽できるわ」

そう言うとりカはタバコを取り出しふかし始める。

「ここにも降下するみたいだな」

4機のUH-1Yがリカ達の居る屋上に近づきホバリングをすると、隊員がファストロープ降下を始める。

それを見物の様に見ていると、隊員の一人がリカ達に走り寄ってくる。

『現地部隊の者か!?!』

英語で話しかけてくる隊員に英語の分からない田島は苦笑い。対してリカは発音の良い英語で返す。

『SAT隊員の南リカです、国連の兵士ですか?』

『国連対バイオテロユニットのヘックス中尉だ。
中の状況を教えてくれ』

『生存者はエントランスに立てこもっており、他はターゲットに占領されています』

『そうか、君達はここで待機していてくれ』

ヘックスと名乗った隊員は降下した隊員を引きつれ建物内に入っていく。

「お前英語話せたのか…」

流暢に話すリカを珍獣を見るような目で見ていた田島。
それにリカはフフンと笑うと。

「米軍の兵士を落とす時に必要だったからね」

「なんで落とす必要があったのか気になるが、聞かない事にする」

「それが一番よ」

「サクラよりダリア、聞こえるか？」

「ダリアどうぞ」

「国連の部隊は無事に展開した、空港のターゲットが掃討されるのは時間の問題だろう」

「俺達はどうすれば？」

「エントランスに戻って来い、任務終了だ」

「了解、戻れだ」と

「はいはい、仕事が楽に終わってラッキー」

うつ伏せから立ち上がり、また胸を揉み始めるリカ。
田島はもう気にしないと云った感じに撤収準備を始める。

「しかしやっぱり不思議だな」

「何がよ」

「お前が言っていた事だよ、国連の部隊がここに来る件」

「ああ、そうね。言っただけで床主って獲り得ないしね」

「取り柄って…まあ行くとしたら東京だからな…」

「それに対バイオテロ部隊、国連にそんな部隊があるなんて初耳よ」

「ま、考えてもしょうがないさ。行くぞ」

「はいはい」

先に行く田島の背中を見ながらリカは、地獄の真っ只中に居るだろう親友を考えながら後に続いていく。

一方、空母ジョン・アーウィンではセレナは居なかった。

彼女は現在イージス駆逐艦シュトルムに乗艦していた。

監視していた米軍のヴァージア級潜水艦に動きがあった為であると、元々彼女はシュトルム艦長だから。

「米潜水艦に状況は？」

「現在本艦隊の方位140、距離2500、深度60にて固定ハッチ開放音を探知しました！」

「先制核攻撃：早すぎるわ、目標は判る？」

「グリット、ノーヴェンバー・パパ・インディア1・4・5。中共の吉林省通化基地並びに北鮮の基地！」

「ミサイル発射音感知！第一弾、第二弾！」

「司令、どうしますか？」

「……米軍にミサイルは無視します。ロシア、中共、北鮮のミサイル監視を厳に」

「アイ・ママ……」

今の彼女らに出来る事は無い、セレナは十字を切り。
神に祈るのであった……

チャプター1 - SS2 (後書き)

はてさて、今回はリカさんと死ななかった田島さん。

最後のちよっぴり背セレナさんでしたが。

時系列無視しまくり!!!!!!

まあこれも後の話の為の…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2481p/>

学園黙示録×バイオハザード

2011年3月14日12時31分発行